

NO FENCE

vol. 72 2021年5月



〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

2021年度Web総会活発な意見・提案出て、無事終了

去る4月24日夜のWebによるNO FENCE総会は、過半数の了承を得て総会議案が、採択されました。ハガキに因る了承39通、当日参加での意思表示6人、電話・メールによる了承2人ほか。ハガキに記された意見・要望、当日総会での意見表示など、以下にその主なものを記しますが、活発な総会でありましたこと、ご報告します。尚役員は一部変更がありました。総会の返信用のはがきで、当会の顧問芝田弘之氏（1960年1月29日新潟から北朝鮮に渡られた芝田孝三氏の兄）が、去る2月25日96歳で亡くなられたことを奥様が知らせて下さいました。顧問から芝田弘之氏のお名前を取り去ります。また総会直前の交渉で、主に今年の活動方針案の一つ、北韓人権市民連合が今年の2月に発表した報告書「Blood Coal Export from North Korea」（血に塗られた北朝鮮の石炭輸出）の翻訳作業の一員にということで、大分市在住の房崎達夫氏に世話人になっていただけが出来、総会で了承されました。

〈芝田弘之氏追悼〉芝田弘之氏は2014年7月の本紙第30号で、「孝三の正確な命日だけでも知りたい。遺品があったら一つだけでも受け取りたい。多摩墓地にある芝田家の墓に命日を刻みたい。孝三は生きていることになっている。」と語っている。弘之氏はこの後6年間頑張られたが、この願いが叶えられず、他界された。氏のこの切なる願いを改めて記憶し、氏のご冥福を祈りたい。芝田孝三ご夫妻が日本を離陸する時の新聞記事を資料として同封します。

〈総会に寄せられたご意見・ご要望〉「Web講演を継続してほしい。韓国に亡命している脱北者の意見を多く聞きたい」（山元泰生氏）。「韓国の多くのNGOとの連繋に努めてほしい。中国に対し、国連の5つの常任理事国の一つであるのだから、国際人権規約の自由権規約＝市民的政治的権利に関する国際規約を批准するように強く国際的に求めてほしい。」（本田徹氏）。「金正恩政権打倒の為の最

掲載しました

1960.1.18

四国新聞

公務員の職捨て

日朝友好にも努力

いろいろな話題を乗せて北朝鮮は福岡に進んでいた。こうした中で、國立音楽院の職を投げつて朝鮮人の妻との二人のこととともに新しい生活を妻の祖国へ託した日本人青年があり、二十九日に新潟を出発して六次福岡船で北朝鮮へ渡っていく。

高松市瓦町の芝田幸三さん(31)た。申さんは、死んだ先夫とのふと結婚した芝田さくら、いろいろが話題の・・・芝田さんは香川県庁の職業安定課に勤めていたが、昨年十一月一日、高松市瓦町で科学館に舞い込んだ娘ちゃんの二歳未満たゞて、妻の故郷で新しい人のこどもの将来を考え、北朝鮮への帰國を希望していた。申さんは一生懸命入ることを心に決め、昨年十二月三十日付で県庁を退職、申さみずから帰郷申請の手続きをそつと申さん(31)と結婚



出発の日を前に荷物を送り出す芝田さん夫婦

芝田さん、妻の祖国・北朝鮮行き決意

愛情は国境を越えて...

(資料) 1.

後の踏ん張りどころに、時至っているものと考えます。お互に最後の死力を尽くして頑張りましょう!! 私は長崎の被爆二世ですので、日本の核兵器禁止条約への署名と批准を強く求め、北朝鮮、中国の非核化のためにも頑張ります。」(田平啓剛氏)。「北朝鮮内部で体制を変革する動きが中々見えてこないのがもどかしい。」(山田文明氏)。「2021年度の活動方針案全てとてもすばらしいと思います。ロボット化、奴隸化した日常に少しでも共感の輪が広がりますように。」(保坂信子さん)。

中田さんは三十三年、東北大文学部を卒業し、公務員六級試験の難関を突破して労働省に入つたという出来られた経歴の持つてじる。

芝田さんは三十三年、上野第一高等学校を卒業して朝鮮人の前夫と結婚したが、戦後高松市に引きあがってきた。朝鮮船運営会社は死んだため、申さんは幼い二歳のことを抱えて、生活のために傭人の援助で市内瓦町に小さな料金を開かれたわら、朝鮮語

たん能なところから朝鮮人学校の教師をしていた。申さんの経験は申さんと親しく交際しているうちに愛情を結ばれ、結婚へ進んだ。周囲の人たちは反対したが、二人はくじけなかつた。申さんの母子二人が東京都葛飾区志村中台町のこの結婚を思い止まらせようとしたが、一人の愛情に向けて結婚を許した。そしていま未だ子の専田さんが春の祖国へ行くことを……。

政治的なもの

はない^(さ) 芝田

十七日 初松山富島町の芝田さ

ん夫妻のアパートを訪れるとき

で荷物をすませ、日赤新聞

セフターあいに送り出はかりだ

った。あと毎日通つた渡航の日

前には、芝田さんは北朝鮮へ渡る

決意をこう語りしている。

私がほんのないこじもたちの將

來を挙げ、北朝鮮へ行くのがも

ちもひいて「一人とも北朝鮮の事

情を知りませんし、これからい

ういの筋筋もあるでしょう。

私が「ほん心配しないのは、

私の北朝鮮行きを石からも左か

らも警報されることです。私は別に政治的なものは何もありません。これまでのことはいつでも県

(ふ記算何回も
該ふ下さる。奥さんの
申性淑さんの経歴も。)

今は五月ですから、春の詩を二つ紹介します。

田園を能く詠つた辛夕汀(1907~1974)の「五月となれば」。今一つは以前本紙(2017年9月第45号)で紹介した趙明熙(1892~1942)の「春の芝生の上で」。いずれも金素雲訳編『朝鮮詩集』(岩波文庫、1954年)から。趙明熙は『満州パルチザン(たち)』という小説(当時スターリン当局が原稿を没収、未公開)を書いて、スターリンから民族主義者として検挙処刑されたが、金日成のパルチザン伝説を明らかにする重要な作品である(本紙45号記事参照)。

の実態

五月となれば
辛夕汀

五月からは 一ぱし植物の匂ひがする。
(体)

五月ともなれば
そのまゝ土に捨てたら
いまにも四肢から青い芽が生えて出さう。
(モ)

五月の頃ほひは
希はくばわが身よ 植物性と變れ。
(麦)

日蔭は如何に暗からうとも
首から出た青い芽は 光の方向へ延び上らずにゐない。
(イ)

五月が來たら

血脉はそのまゝ葉脈となれ、

胸にたつぶり葉綠素を蓄へて
空仰ぐひととの樹と生きるのだ。

(諸注)四肢 一雨季と雨尾

一はレ——人前にひとなみに。併ともこ一本

(諸注)かつことんびは事務局

開港J/J開港は五大陸の費会の支那 SOS

春の芝生の上に

趙明熙
チヨンヒ

芝生でわたしが跳びまろぶとき
母上がこのさまを見てはくださるまいか。

をさな兒が乳房にすがつて甘えるやうに
わたしが春の芝生に戯れ遊ぶとき
まこと母上はこのさまを見てくださるまいか。

狂ほしいばかりの身悶えに

母よ！ 母よ！ と呼び立てれば

地が應へ 空が應へて

いづれが母か 辨別つすべなや。

(手)

(語注) まろぶ(転ぶ)——ころがる。
すべなや——すべ(左遷)無事。詠嘆の聲。
母——先ず自分の母であり次に大自然。
天地。(事務局注)

趙明熙が小説
で描いた満州
ハルチザン(たち)は
北の金聖柱(金日成)
よりも年上のハルチザン
閻士たたかたと思われ
北の金日成はこの作品
に関心を持ったかったと
言われる。No Fence
会報45号参照。
(No Fenceのホームページ
のBooksに会報掲載。)

平凡社 / 世界大百科事典 第2版の
解説

1892-1942 ちょうめいき【趙明熙 Cho Myōng-hŭi】

朝鮮の詩人、小説家。号は抱石。忠清北道鎮川生れ。渡日して東洋大学哲学科に学ぶ。1923年帰国して記者生活のち、28年ソ連領に入り主に教員生活を送る。36年ハバロフスクでソ連作家同盟極東地区常務として働き、ソ連で生涯をおえた。この間25年カツグ(朝鮮プロレタリア芸術同盟)創建に参加。故郷を奪われた主人公の闘いと死を描いた代表作《洛東江》(1927)は、革命的ロマンティズムに溢れる短編であり、朝鮮プロレタリア文学史にきわだつ秀作といえよう。

(資料) 2. 前記 芝田孝三、申性淑夫妻は 1960年に北に渡った 49036人のうちの2人です。この資料も大事です。

資料—1959年12月から1984年までに北に渡った人の数(法務省入管資料)

年度	回	人員	世帯	年度	回	人員	世帯	年度	回	人員	世帯
1959	3	2,942	781	1968	中	—	—	1977	2	180	103
1960	48	49,036	12,460	1969		—	—	1978	1	150	52
1961	34	22,801	6,696	1970	断	—	—	1979	2	126	
1962	16	3,497	1,402	1971	7	1,318	485	1980	1	40	
1963	12	2,567	1,157	1972	4	1,002	589	1981	1	38	
1964	8	1,822	815	1973	3	704	328	1982	1	26	
1965	11	2,255	1,046	1974	3	479	245	1983	0	0	
1966	12	1,860	855	1975	3	379	199	1984	1	30	
1967	11	1,831	873	1976	2	256	148	1985	0	0	
合計											93,339

年度が変りますので 同封の振費用紙で

2021 年度の会費の納入をお願いします。

(本号 文責 小川晴久)